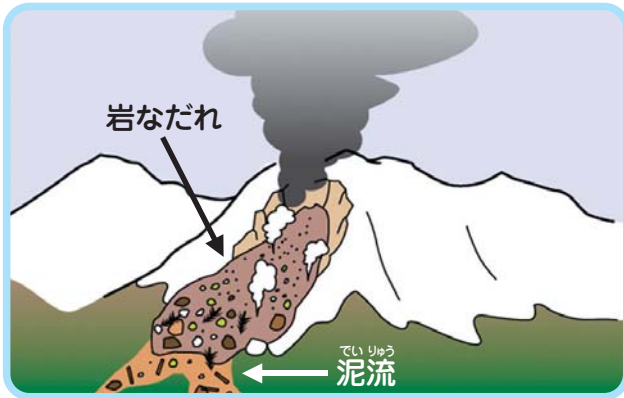


Q  
4-1

たい しょう でい りゅう  
大正泥流ってどんなものだったの？

A

1926年5月24日午後4時17分、十勝岳が爆発して山の一部分が崩れ、高温の岩なだれが起きました。岩なだれは残雪を溶かし、すぐに火山泥流が発生して、富良野川と美瑛川に分かれ、ふもとの街までおよそ25分で流れていきました。



泥流は、森林を破壊し、たくさんの流木と上流の土砂を取り込んで破壊力を強めていきました。ふもとの街一面が流木の海のようになるなど、大きな被害となり、144名の方が亡くなり行方不明になったりしています。



流木の海となった上富良野市街地  
大量の流木が泥流の破壊力を強め、多くの家を押し流し、田畑をつぶしました。



恐ろしい泥流の力  
泥流の力は線路をめぐり上げるほど強いものでした。  
旭川絵葉書倶楽部作成の絵葉書による

大正泥流の様子について、泥流を体験した当時の小学生が次のような感想文を書いています。（※一部を現在の漢字に書き変えています）

上富良野尋常小学校五年(当時) 船引 武  
万雷の一時に落ちてきたような物すごい音をたてて、谷間から真っ黒になって寄せてきたものがありました。みるみる身にせまってひとのみにされた様でした。もうだめだ、死んだ気で高い丘に走り着いたと思うとパッと泥水がかぶさったが、夢中ではいあがった。皆死んで生き残ったのは僕一人だけだと思うと、悲しいやらうれしいやら、何とも言うことのできない感じがしました。（十勝岳爆発災害誌より抜粋）

Q  
4-2

たいしょうでいりゅう う とち  
大正泥流に埋もれた土地をどのようにしてよみがえらせたの？

**A** たいしょうでいりゅう たがや そだ  
大正泥流は、およそ30年もかけて耕し、育てた  
土地を一瞬にして破壊しました。それを見た当  
時の人々は、どんなにがっかりし、絶望したことでしょう。  
さん か いおう ふく どしゃ りゅうぼく う ふた  
酸化した硫黄分を含む土砂や流木に埋もれた土地を、再  
び暮らしやすく、田畑にも使えるように戻すのは、たいへ  
んな苦勞でした。  
当時の人々は、次のようなことを行って、土地を良くして  
いきました。その努力は実り、大正泥流から4年後ぐらい  
になると、稲がまた育つようになりました。

りゅうぼく のそ  
流木の取り除き

川や街を埋めつくした流木を乾かして、ストーブの  
燃料などに使いました。

いし や どろ  
石や泥の取り除き

でいすい はいすい ようすい  
泥水の排水・用水路作り

きゃく と  
客土

他の場所から質の良い土を持ってきたり、たまった  
泥の下にある土を混ぜ合わせたりして、田畑に使える  
土に変えていきました。

ちゅう わ  
中 和

硫黄分の入った酸性の土に、石灰を混ぜて酸度を  
弱めました。



かみ ふらの ちやう やかた ほつ  
上富良野町にある「土の館」は、北  
海道遺産にも指定されている土の  
博物館です。大正泥流の地層を含  
む高さ4mの大きな土の標本を見る  
ことができます。



かいたく  
上富良野町開拓  
記念館の近くに  
ある「泥流地帯」  
文学碑

たいしょうでいりゅう たいざい みうらあや  
大正泥流を題材にした三浦綾  
子の小説『泥流地帯』もぜひ  
読んでみましょう。